



アクティブラーニングで未来の知性を

2019年度が始まり、LABO7も今年で5年目を迎えます。大学入試改革をいよいよ来年に控え、「アクティブラーニング」や「探究学習」などの注目度がようやく増しているようですが、LABO7では、まだそのような言葉が世間に広まっていない時から、すでに私教育の最前線で実践してきました。今回は、「入校の手引き」の冒頭に書いてある3つの「OUR SPIRITS」より、LABO7の学習で普段から心がけていることをお伝えします。

◆大いに聞き、話し、積極的に自己表現しよう。

今でこそ隣どうしやグループで話し合う機会が増えてきたとはいえ、まだまだ「全員一斉に先生の話静静地に聞く」受け身のスタイルが色濃い学校の授業。スマートフォンやパソコンなどの電子機器が浸透し、より豊かになる私たちの生活。その一方で、ここ数年「自分の考えを自分の言葉で話せない」子どもが明らかに増えているように感じます。例えば、「今日は学校でどんなことをしたの?」と聞いても、「理科。」「リレー。」などの1単語だけで返そうとするのです。たった1単語だけでは、親ならともかく、他人には何も伝わりません。これこそコミュニケーション能力の低下・国語力の低下に最もダイレクトに直結する事象です(SEVEN通信バックナンバー:2018年7月『『国語力』は読書量に比例する?』参照)。担当講師も大人ですので、その1単語である程度察することはできるのですが、もしLABO7で生徒にそのような言葉を返されたら、探究授業ではもちろん、個別指導であっても、あえて「単語で言われても分からないよ。」「先生に伝わるように文で話しなさい。」「自分の言葉でいいから、きちんと相手に分かるように伝えよう。」と必ず諭します。

「相手の意見をしっかりと受け止める」だけでなく「自分の考えを相手にきちんと届ける」両方のバランスこそ本当の意味での「コミュニケーション」。最初は抵抗を感じたり、面倒に思ったりするかもしれませんが、LABO7は「しゃべってもいい授業」ですから、失敗をおそれず、思い切って表現してほしいです。

◆すべてのことに興味を持ち、探究する姿勢を持とう。

小学生の探究学習では、学校の学習内容が出発点ではありますが、そこから生徒たちがふと「じゃあ〇〇ってどういうことなの?」と疑問を投げかけてくることがあります。LABO7ではこれこそ学びの大きなチャンスととらえています。ここで「それはね、〇〇ということだからだよ。」とダイレクトに教えてあげることもできるのですが、時間の許す限り「じゃあ、タブレットで調べてみようか。」と生徒自らが疑問を解消できるように促します(SEVEN通信バックナンバー:2018年10月『『あえて不便にする』ということ』参照)。中には、あらかじめ予定していた授業内容以上に高度な疑問を投げかけることもしばしば。そのときは、可能な限りで授業内容を一部変更してでも、生徒たちの疑問の追究と一緒に関わります。

LABO7では探究に関する“脱線”は大歓迎です。学校の学習内容を出発点に、学びの視野をどんどん広げていってください。

◆自分を信じ、他人を認め、率先して行動しよう。

現在LABO7に最も長く通っているのが、小学生の頃から「アクティブラーニング」「探究学習」に慣れ親しんできた高校入試コース(国公立中)の生徒たち。普段は塾内でも比較的大人しい様子ですが、いざ「Communication」のプレゼンやディベートとなった時には、身ぶり手ぶりを使って弁舌をふるっています。それでいて、相手を傷つけるような言動はなく、学力で他人を判断することはありません。授業終了時にみんなの机に広がった消しカスを、ちり取りで率先して片付けてあげる中1生。自分が志望校合格に向けて勉強している中で、先に受験した仲間を思い、「〇〇、合格してるかな…」「連絡まだですかね…」とつぶやく中3生。(その後合格の知らせがありました!)LABO7を通じて、生徒たちが心を鍛え合い、共に学び合い、相手を思い合う数多くの経験を経て、変化の激しい未来を生き抜く知性を養ってほしいと思います。